

私はこの未来の地域医療において新たな集約医療を行うべきだと思う。現在、医療費の削減や医師の偏在および過疎化により、医療の集約が進んでいる。しかしこれにより地域間、世代間、所得間の医療格差が深刻化している。実際、過疎地域で訪問診療、外来、健診を一人で行う母を見て現在の医療制度には限界があると感じる。そこで私が思い描く未来の地域医療は予防と多職種連携に力を入れた集約医療だ。

まず予防については深層学習が可能で医療の効率化に貢献する人工知能や出生からの経過や健診から得られるビックデータ、ICT 機器を駆使することで病気の発症を未然に防ぎ、急変を予測することで事前に治療をしたり、専門医と医療機器がそろった大病院に搬送したりすることが可能になる。また過去には、クリミア戦争に看護師として従事したナイチンゲールは軍人の死因を分析し、死因の8割が伝染病、1割が戦闘、1割がその他だと気づいたという記録がある。そして数学や統計学の知識を生かし、死因別の死亡率の推移を円グラフで示し、突出して高かった伝染病の死亡率を院内の衛生状況を改善することで急速に下げた。現在流行中の新型コロナウイルスについても正確なデータと統計が感染予防や治療薬開発の有効な手段になると思う。さらに、これにより医療資源を効率的に分配し、円滑に治療にあたることができると思う。また、住民の健康状態や年齢に応じて生活習慣病予防や健康指導をオンラインで行う。ここで医療格差を防ぐために、多職種と情報を共有し、連携を確実なものとしなければならない。データの共有において、データのボリュームや多様性に対応できる柔軟性や拡張性に加え、高速で安定した処理能力、そして個人情報扱うに欠かせない安全性が求められる。

次にグローバル化が進むことが予想されるこれから、人種や宗教の多様化に対応し、また障がいの有無によらず「すべての人に健康と福祉を」もたらす医療で必要とされるのは多職種連携によって多面的に治療法を検討することだ。これは、病気に合わせて治療法を決定する医師と、患者のバックグラウンドを知ったうえでそのプランに沿って動く多職種の人の連携なくしては成り立たない。また、このように医師と患者が遠隔でコミュニケーションをとる医療システムを行うにあたって患者一人一人の意思を尊重することが今まで以上に大切になると思う。例えば、自分の地元を離れて大病院に行くことを拒む人がいれば、医師の

派遣や、遠隔診療により患者が望む治療に近づける。医師と患者の信頼関係の大半はノンバーバルコミュニケーションにより培われるというデータがある。だから患者に関わる全ての人がこれまで以上に自分の言葉や態度が患者にどのような影響を与えるのかを考慮し、患者に寄り添う全人的な医療を行うべきだ。

私は将来このような予防と多職種連携に重きを置いた地域医療に従事し、より良い未来を創りたいと思う。